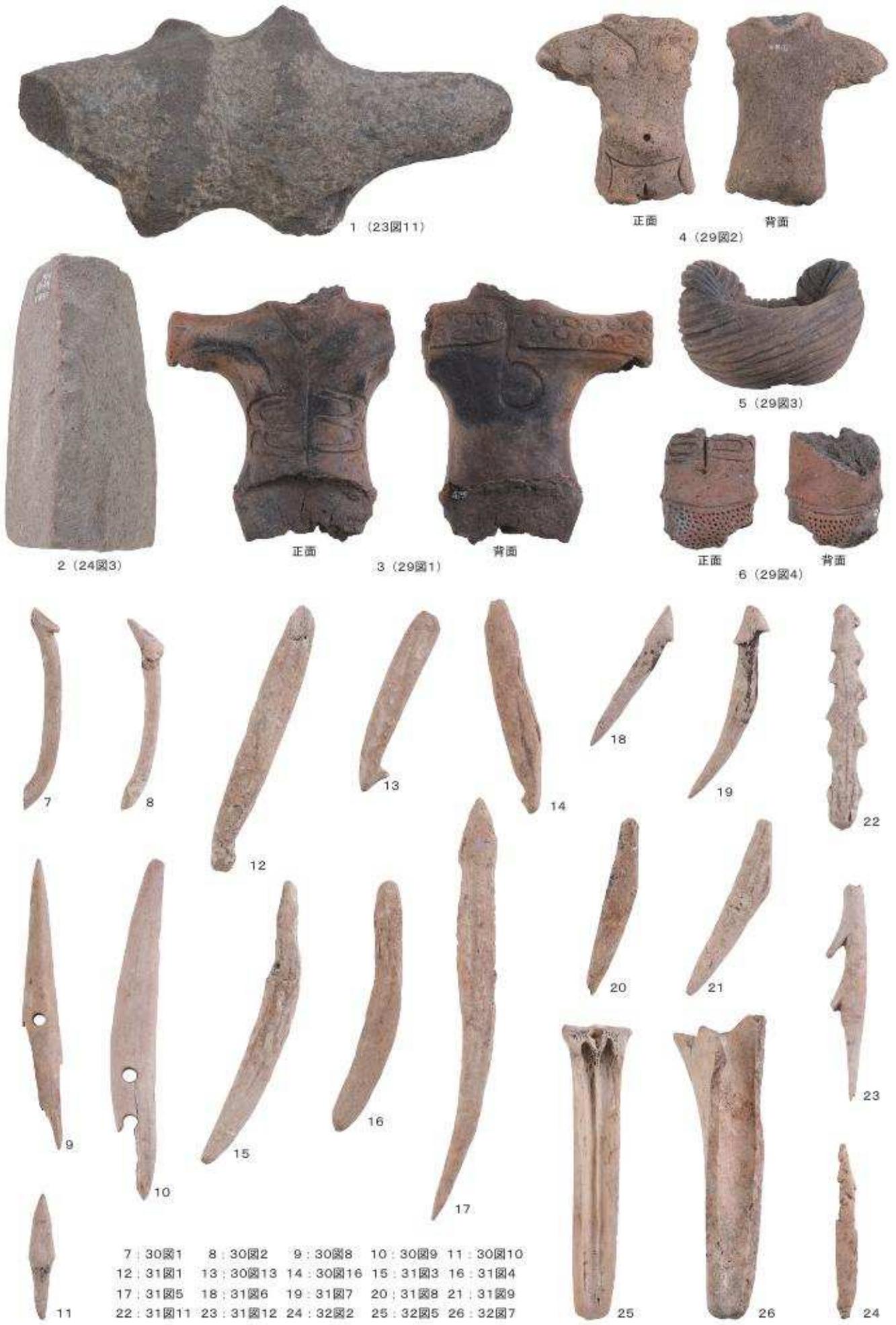


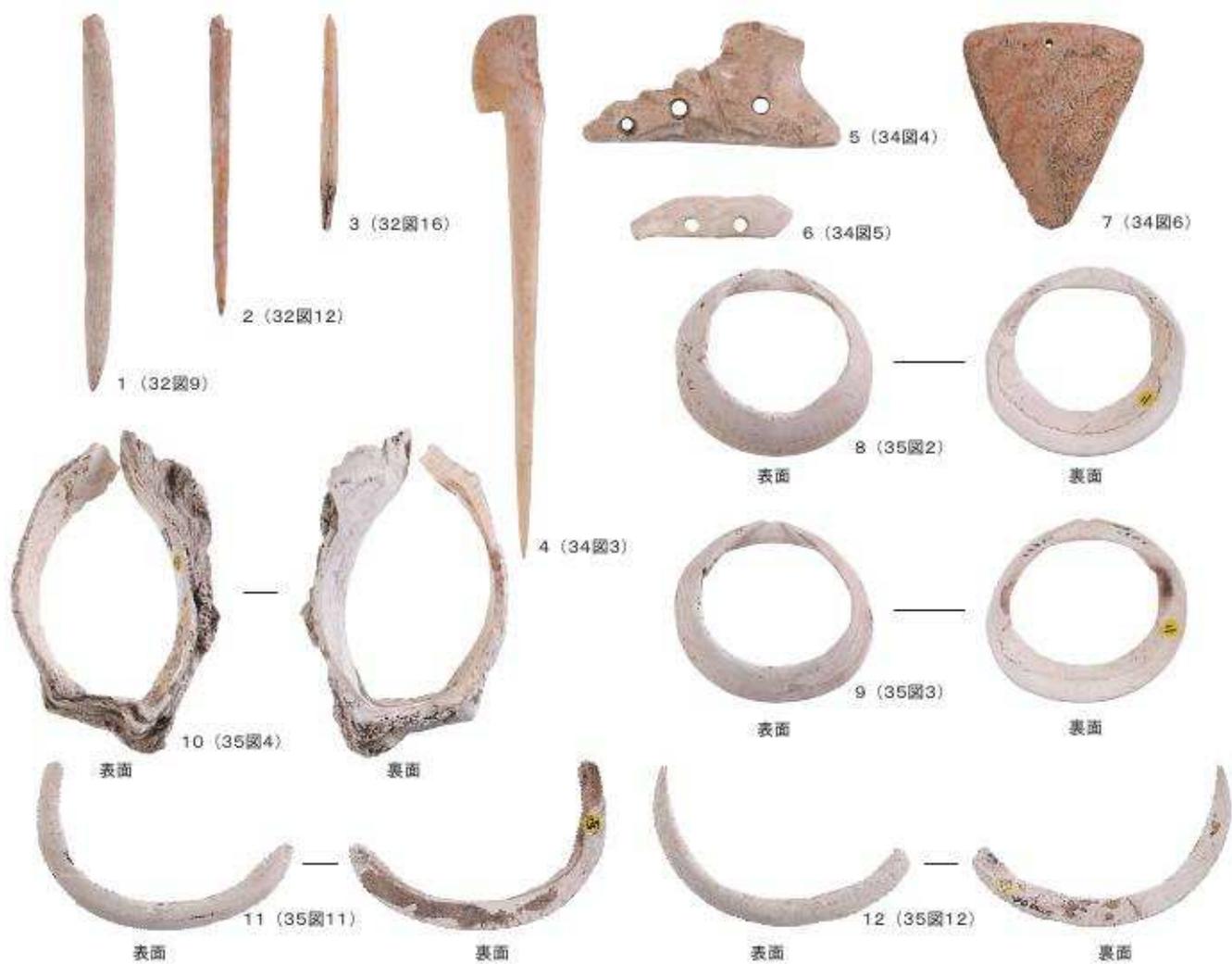
【絶尺】 10・11・21：実寸 1~9・12~20・22：1/2

写真図版10 出土遺物 (5) 土器・石器・石製品



【縮尺】1~26: 1/2

写真図版11 出土遺物(6) 石製品・土製品・骨角製品



【縮尺】1~12：1/2

写真図版12 出土遺物 (7) 骨角牙製品・貝製品

# とう ぐう かい づか 東宮貝塚

## 第2次調査

### 調査要項

遺跡名：東宮貝塚ほうじゅうかいづか（鳳寿寺貝塚）（県遺跡地名表登録番号：20005）

所在地：宮城県宮城郡七ヶ浜町東宮浜字寺島・鶴ヶ湊

調査原因：個人住宅建替工事

調査主体：七ヶ浜町教育委員会

調査担当：七ヶ浜町教育委員会 生涯学習課 文化財係 田村 正樹

調査期間：平成29（2017）年7月20日～8月24日

調査対象面積：156.75㎡

調査面積：約56㎡



## 1 遺跡の概要

東宮貝塚は七ヶ浜町東宮浜字寺島、鶴ヶ漆に所在する縄文時代後・晩期から平安時代の貝塚・生産遺跡である。遺跡は曹洞宗鳳寿寺が所在する丘陵（標高約7m）の東斜面とその斜面麓の住宅地に広がっており、「鳳寿寺貝塚」とも呼ばれる。

過去には「古代の生活」の解明を目的に、宮城県塩釜女子高等学校社会部（以下、塩釜女子高校社会部）による調査（1次調査）が昭和40（1965）年に行われている。丘陵東斜面の鳳寿寺参道に3か所（A・D・Eトレンチ）と丘陵麓の住宅地に2か所（B・Cトレンチ）の計5か所で調査が行われ、弥生時代中期の遺物包含層と炉石を伴う製塩遺構、貝層などを検出した（写真図版1-3・4・6）。遺物は縄文土器、弥生土器、製塩土器、土師器、須恵器、石器、土製品（土錘）、骨角製品（銚、ヤス、弓弭、卜骨など）、貝製品（貝輪）、動物遺存体（貝類、魚類、鳥類、哺乳類）などが出土した（写真図版1-7・8）。Cトレンチではイノシシの頭骨が2点出土している（写真図版1-5）。

調査回数	調査目的	調査年	調査主体	遺構・出土遺物等	掲載書籍
1次	学術調査	1965年7月28日～8月3日	塩釜女子高等学校社会部	製塩遺構、遺物包含層、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器、骨角製品、石器、動物遺存体	後藤勝彦2013
2次	個人住宅建替え	2017年7月20日～8月24日	七ヶ浜町教育委員会		本書報告

第1表 東宮貝塚における発掘調査歴

## 2 調査の方法と経過

今回の調査は、丘陵東斜面下（標高約2m）での個人住宅建替工事に伴う調査である。平成29（2017）年5月21日付けで地権者より専用住宅の建替工事にかかる「専用住宅建替工事と埋蔵文化財のかかわりについて」の協議書（七歴第17-62号）が提出された。工事には地盤改良工事として計画地内に最大径600mmの柱状改良杭を2.4～4mの深さに65本埋設する計画が含まれていた。塩釜女子高校社会部による調査において計画地周辺で弥生時代中期の製塩遺構が検出されていることから、地盤改良工事による遺跡への影響が懸念された。平成29（2017）年6月23日に確認調査を実施した結果、計画地西側を中心に現地表面から約20cm下で遺物包含層を検出し、弥生土器や土師器、須恵器、製塩土器などが出土した。これを受け、地権者及び施工業者と遺跡保存のための協議を行ったところ、建築位置を当初の位置より東へ1m移動することでベタ基礎への工法変更が可能となり、計画地の約156㎡のうち、住宅基礎の影響を受ける約56㎡について平成29（2017）年7月20日から8月24日まで本発掘調査を実施した。今回の調査は塩釜女子高校社会部による調査以来、2回目の調査である。

調査は表土（1層）、黒褐色土（2層）及び暗褐色土（3層）の一部を重機で掘削し、以下を人力により調査を行った。精査後に写真撮影、遺構平面図、調査区平面図、土層断面図の作成を行った。遺構等の平面図実測に際しては、道路基準点（T1041-2）及び任意に設定した測量杭（T-1）を測量基準点とし、電子平板による測量作業を行った。

T1041-2 : X = -187376.495m Y = 19201.569m 標高値 : 2.030m

T-1 : X = -187385.844m Y = 19200.677m 標高値 : 2.768m

遺構等の図化作業においてCUBIC社製の遺構実測支援システム「遺構くん」Ver.2017を使用した。遺構等の写真撮影はデジタル一眼レフカメラを用いて撮影した。調査終了後、重機で埋め戻しを行った。なお、検出した遺構については一部で掘り下げや精査を行ったが、調査期間の関係から基本的に遺構検出のみに留めている。





層番号	分類	土色	粒度	特徴
1a層	砂礫層	暗オリーブ色 5Y4/3	礫、極粗粒砂	表土、木片を含む
1b層	砂層	暗褐色 10YR3/3	粗粒砂	破砕された貝殻を含む(面積割合10-15%)
1c層	粘土層	オリーブ褐色 2.5Y4/6	粘土	土器片、小礫、根を含む(面積割合10-15%)
1d層	砂層	黒褐色 10YR2/3	中粒砂-細粒砂	小礫を含む
1e層	砂層	黒褐色 10YR2/2	粗粒砂-中粒砂	粘土ブロック(10YR4/6 褐色)、破砕された貝殻、土器片、炭化物、小礫を含む(面積割合15-20%)
1f層	砂礫層	褐灰色 10YR4/1	礫、極粗粒砂	貝殻、土器片、礫を含む(面積割合7-15%)
2a層	土層	黒褐色 10YR2/3	中粒砂	破砕された貝殻、土器片、炭化物、小礫を含む(面積割合2-7%)
2b層	土層	黒褐色 10YR2/3	中粒砂	破砕された貝殻、土器片、炭化物、小礫を含む(面積割合10-15%)
3層	土層	暗褐色 10YR3/4	中粒砂	貝殻(カキ、アサリ)、土器片、炭化物、礫を含む(面積割合10-15%)
4層	土層	極暗褐色 7.5YR2/3	細粒砂	貝殻(カキ、アサリ)、土器片、炭化物、灰、焼土ブロックを含む(面積割合7-10%)
5層	土層	黒褐色 10YR2/3	細粒砂	貝殻(二枚貝)、土器片、炭化物、灰ブロックを含む(面積割合10-20%)
6層	砂層	暗褐色 10YR3/4	礫、極粗粒砂	破砕された貝殻、炭化物を含む(面積割合3-5%)
7層	土層	暗褐色 10YR3/3	中粒砂	貝殻(カキ)、土器片、炭化物を含む(面積割合3-5%)
8層	土層	褐色 7.5YR4/4	極粗粒砂-粗粒砂	9層(炭化物層)を貫く層、灰ブロック、破砕された貝殻、土器片炭化物、小礫を含む(面積割合20-25%)
9層	炭化物層	黒色 10YR1.2/1		炭化物集中遺構 炭化物を含む(面積割合30-40%)
10層	粘土層	明黄褐色 10YR7/6	粘土	炭化物を含む(面積割合3-5%)
11層	焼土・灰層	暗褐色 7.5YR3/3		SL1製塩遺構、灰ブロックを少量含む(面積割合2-3%)
12層	焼土・灰層	暗褐色 7.5YR3/3		SL1製塩遺構、貝殻、土器片、炭化物を含む(面積割合2-4%)
13層	灰層	褐色 7.5YR4/4		1次調査検出の製塩遺構の一部、灰が硬化した層、炭化物を含む(面積割合3-5層)
14層	灰層	にぶい黄褐色 10YR4/3		SL1製塩遺構、炭化物を含む(面積割合2-3%)
15層	砂層	オリーブ褐色 2.5Y4/6	中粒砂-細粒砂	SL1製塩遺構、貝殻、炭化物、小礫を含む(面積割合2-3%)
16層	砂層	暗褐色 10YR3/3	中粒砂-細粒砂	SL1製塩遺構、炭化物を含む(面積割合2%)、14層との境界に1.2mmの厚さで灰層が入る
17層	灰層	灰褐色 7.5YR4/2	中粒砂-細粒砂	SL1製塩遺構、破砕された貝殻、土器片、炭化物を含む(面積割合5-7%)、層下部から破砕された土器片が面的な広がりを持ち出土している
18層	砂層	黒褐色 2.5Y3/2	中粒砂-細粒砂	破砕された土器片、炭化物、小礫を含む(面積割合15%)
19層	土層	黒褐色 10YR2/3	細粒砂	炭化物、小礫を含む(面積割合3-5%)
20層	土層	黒褐色 10YR2/2	細粒砂	炭化物、小礫を含む(面積割合5-7%)
21層	土層	黒褐色 10YR2/3	細粒砂	炭化物、小礫を含む(面積割合7-10%)
22層	土層	黒褐色 10YR2/2	中粒砂-細粒砂	破砕された貝殻、土器片、小礫を含む(面積割合20%)
23層	土層	暗褐色 10YR3/4	中粒砂-細粒砂	炭化物、小礫を含む(面積割合3-5%)
24層	焼土・灰層	暗褐色 10YR3/4	中粒砂	SL1製塩遺構、製塩土器片、炭化物、灰ブロックを含む(面積割合10-30%) この層の下に灰ブロック-焼土の硬化面がある
25層	混土貝層	暗褐色 10YR3/4	細粒砂	貝殻、破砕された土器片、炭化物を含む(面積割合30-40%)
攪乱1	土層	黒褐色 10YR2/3	粗粒砂-中粒砂	破砕された貝殻、土器片、小礫、根を含む(面積割合25-30%)、攪乱2との境界に極粗粒砂(5Y4/3 暗オリーブ色)を含む
攪乱2	土層	黒褐色 10YR2/2	粗粒砂	破砕された貝殻、土器片、小礫を含む(面積割合10-15%)
攪乱3	土層	黒褐色 10YR3/2	中粒砂	破砕された土器片、小礫を含む(面積割合5-7%)

第2表 調査区土層観察表

層番号	分類	土色	粒度	特徴
1層	土層	暗褐色 10YR3/3	粗粒砂-中粒砂	破砕された貝殻、土器片、炭化物、焼土、灰ブロックを含む(面積割合10-15%)
2層	砂層	暗褐色 10YR3/4	極粗粒砂-粗粒砂	
3層	土層	暗褐色 7.5YR3/3	粗粒砂-中粒砂	破砕された貝殻、土器片、炭化物、焼土を含む(面積割合10-15%)
4層	土層	黒褐色 10YR3/2	シルト	炭化物を含む(面積割合3-5%)
5層	土層	暗褐色 10YR3/4	粗粒砂-中粒砂	破砕された貝殻、土器片、炭化物を含む(面積割合15-20%)
6層	土層	暗褐色 10YR3/3	細粒砂	破砕された貝殻、土器片、炭化物を含む(面積割合3%)
7層	土層	黒褐色 10YR3/2	細粒砂	破砕された貝殻、土器片、炭化物を含む(面積割合15-20%)
8層	土層	黒褐色 10YR3/2	極細粒砂-シルト	破砕された貝殻、土器片、炭化物を含む(面積割合10-15%)
9層	土層	黒褐色 10YR3/1	細粒砂	破砕された貝殻、土器片、炭化物を含む(面積割合15-20%)、灰(10YR6/2、灰黄褐色)が層状に入る
10層	砂層	暗褐色 10YR3/4	粗粒砂-中粒砂	貝殻、炭化物を含む(面積割合5-7%)
11層	土層	黒褐色 10YR3/1	中粒砂	貝殻、炭化物を含む(面積割合5%)
12層	土層	黒褐色 10YR3/2	中粒砂	動物骨、貝殻、炭化物を含む(面積割合10-15%)
13層	灰層	にぶい黄褐色 10YR6/3	シルト	SL1製塩遺構、炭化物、被熱した土器片、貝殻、灰(10YR3/1、黒褐色)を含む(面積割合15-20%)
14層	灰層	褐色 7.5YR4/4	細粒砂	SL1製塩遺構、炭化物、被熱した土器片を含む(面積割合10-15%)
26層	貝層	黒褐色 10YR2/3	細粒砂	カキを主体とした貝殻、炭化物、破砕された土器片を含む(面積割合25-30%)
27層	焼土・灰層	暗褐色 7.5YR3/4	細粒砂-極粗粒砂	SL1製塩遺構の焼土・灰層、炭化物、土器片を含む(面積割合10%)、疎くしまっている

第3表 サプトレンチ1西壁土層観察表

層番号	分類	土色	粒度	特徴
1層	土層	極暗褐色 7.5YR2/3	細粒砂	貝殻、土器片、炭化物、灰ブロックを含む(面積割合7-10%)、調査区南壁4層に対応
2層	砂礫層	暗オリーブ色 5Y4/3	礫、極粗粒砂	破砕された貝殻、土器片を含む(面積割合2-3%)
3層	土層	黒褐色 10YR2/3	細粒砂	貝殻、土器片を含む(面積割合5-7%)

第4表 石組遺構2土層観察表

### 3 発見した遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構は製塩遺構1か所、塩釜女子高校社会部による調査トレンチ（Bトレンチ）、石組遺構3基、貝層1か所、炭化物集中遺構1か所である。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器、石器、骨角製品、貝製品、動物遺存体が出土した。また、旧地形は西側丘陵から東・南側に向けて緩やかに傾斜していることが今回の調査で判明し、現況の平坦な地形は丘陵斜面を削り、周辺を造成したためであることが分かった。

#### (1) S L 1 製塩遺構（第1～6図、写真図版2～5）

調査区西側、表土（1層）、黒褐色土（2層）、暗褐色土（3層）、極暗褐色土（4層）の下層で検出した。遺構は灰や炭化物、焼土、破碎された製塩土器などを含むマウンド状の高まり2か所と硬化面1か所で構成されている。これらは南北約6m、東西約5.5mの範囲で検出したが、調査区中央と西側の調査区外にさらに広がると考えられる。マウンド状の高まりは北側をS L 1 製塩遺構（北）、南側をS L 1 製塩遺構（南）にそれぞれ区分したが両者の境界は明瞭ではない。北側は灰、炭化物、焼土、破碎された土器類が重複し互層をなしている状況であり、南側は灰や炭化物、赤茶色の焼土（細粒砂）が硬く締まった状況であった。S L 1 製塩遺構（北）で見られた灰、炭化物、焼土等が互層をなす状況は林崎貝塚においても確認されている（七ヶ浜町教育委員会2016）。林崎貝塚の事例は縄文時代晩期中葉（大洞C2式）頃と考えられており、時期的な隔りがあるが両者の形成過程については共通点が多い。硬化面は調査区西壁際で検出し、マウンド状の高まりの西側に位置する。硬化面は全体的に暗褐色を呈し中央部はやや窪んでいた。調査区西壁の堆積状況や隣接して検出した1次調査時のトレンチの存在から、硬化面は1次調査で検出された製塩遺構（製塩炉）の一部で、薄紫色の灰層（宮城県塩釜女子高等学校社会部1965）に当たることが分かった。1次調査ではこの下層で炉石を検出しているが、今回の調査では確認できなかった。

この硬化面とマウンド状の高まりについて、両者が一体のものなのか、それぞれ独立したものなのかは検出状況からは確定できなかった。調査時は検出面の高低差や出土遺物の違いなどは認められなかったことから、両者は同時期に機能していたと考えられる。硬化面とマウンド状の高まりそれぞれを製塩工程上の機能・役割を異にする別な設備とする捉え方、またはマウンド状の高まりは硬化面の外縁部に位置することから、これを灰、炭化物、焼土等の製塩行為に伴う残滓等を廃棄・集積する廃棄帯で、硬化面が本来の製塩炉とする捉え方など、両者の機能については複数の捉え方ができる。両者の機能及び役割については、今後更なる検討が必要である。

遺物はサブトレンチ1北側を中心に、弥生土器の甕（3図6・7・9）、鉢（3図1・3・8・10）、壺（3図2）、製塩土器（3図4・5）、動物遺存体などが出土した。調査区南西角やサブトレンチ1南側の3～5層からも弥生土器と製塩土器が出土している（3図17・18、4図1～13、5図1～17、6図1～8）。遺構は一部のサブトレンチにおいて精査を行っているが、基本的に遺構のプラン検出に留めたため、遺構内出土の遺物は少ない。遺構覆土から弥生時代中期の土器が主体的に出土していること、製塩遺構の覆土（サブトレンチ1北側・7層出土）から出土した炭化物の放射性炭素年代測定では弥生時代中期頃の年代値が得られたことから、製塩遺構はこの時期に機能していたと考えられる。松島湾における弥生時代の製塩遺構は西の浜貝塚（宮城県教育委員会1968）、里浜貝塚西畑北地点（鳴瀬町教育委員会1998）が挙げられるが、検出事例は少ない。里浜貝塚では西畑北地点の調査で一辺約1.5m、ほぼ正方形の凝灰岩角礫を敷き詰めた製塩遺構を検出しており、出土遺物から弥生時代中期前葉の寺下田式に位置づけられている。製塩遺構の西側に灰層が広がっており、これを廃棄帯と認識している。

## (2) 1次調査トレンチ (Bトレンチ) (第1図、写真図版2、3)

S L 1 製塩遺構の中央部で、製塩遺構の一部を垂直に掘り込んだ南北約2m、東西約1.2mの長方形区画を確認した。区画の床面にはS L 1 製塩遺構の構築以前の面が露出していた。この区画について、当町教育委員会が所蔵する塩釜女子高校社会部による調査の記録写真や図面、調査報告書の記述と照らし合わせた結果、この区画が1次調査のBトレンチの一部であることが判明した。

## (3) 石組遺構 (第1～3図、写真図版3、4)

調査区西側で1基、中央部で2基検出した。石組遺構は直径60～65cm、深さ15～20cmの円形の穴に石を敷き詰めたもので、3基ともほぼ同じ規模・形態を示す。用途については礎石の根石などが考えられるが、詳細は不明である。規模・形態から3基とも同時期に構築されたと考えられるが、詳細な時期については不明である。ただ、石組遺構1はS L 1 製塩遺構本体、石組遺構2・3はS L 1 製塩遺構の覆土(3層)をそれぞれ掘り込んで構築していることから、製塩遺構より新しい時期のものである。なお、石組遺構1・2の埋土から弥生土器や製塩土器(3図11～16)が出土しているが、埋め戻しの際に混入したものと考えられる。

## (4) 貝層 (第1・2図、写真図版2、4)

調査区南側、極暗褐色土(4層)の上層で長軸約1.7mの楕円形の貝類の集積を検出したことから、これを貝層と認定した。貝類はマガキ、アサリ、イガイ、ハマグリが出土し、そのうちマガキが70%を占める。遺物は列点文や植物茎回転文が施された弥生土器、土師器、製塩土器片が出土している。製塩土器の底部は平底のものである。貝層の形成時期は、出土遺物や製塩遺構より上層で検出されていることから判断すると、弥生時代中期から平安時代頃と考えられる。

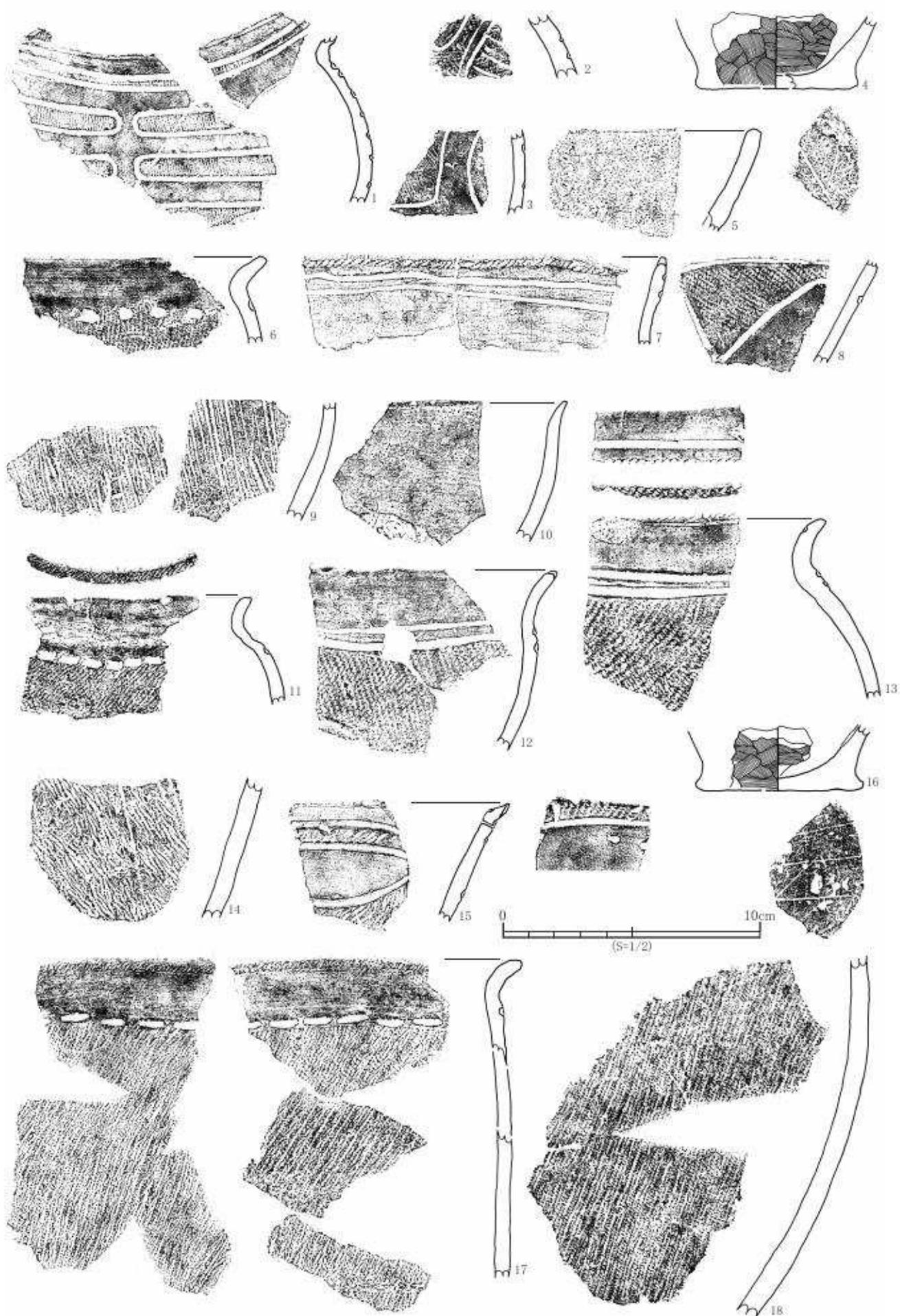
## (5) 炭化物集中遺構 (第1・2図、写真図版4)

炭化物集中遺構は、S L 1 製塩遺構の検出面より約50cm低い調査区東壁際、褐色の粗粒砂(8層)の下層で検出した。炭化物は南北約1m、東西約2mの楕円形に薄く分布しており、さらに東側の調査区外に広がっていると考えられる。共伴する遺物がなく、調査時は遺構の形成時期が分からなかったが、炭化物の放射性炭素年代測定を実施したところ、古墳時代前期から中期頃の年代値が得られた。また、炭化物がC4植物である可能性が高いことも分かった。当町では古墳時代前・中期の遺構や遺物が検出された遺跡はこれまで確認されておらず、当該期の七ヶ浜半島の状況は不明な点が多いことから、今後の更なる検討が必要である。

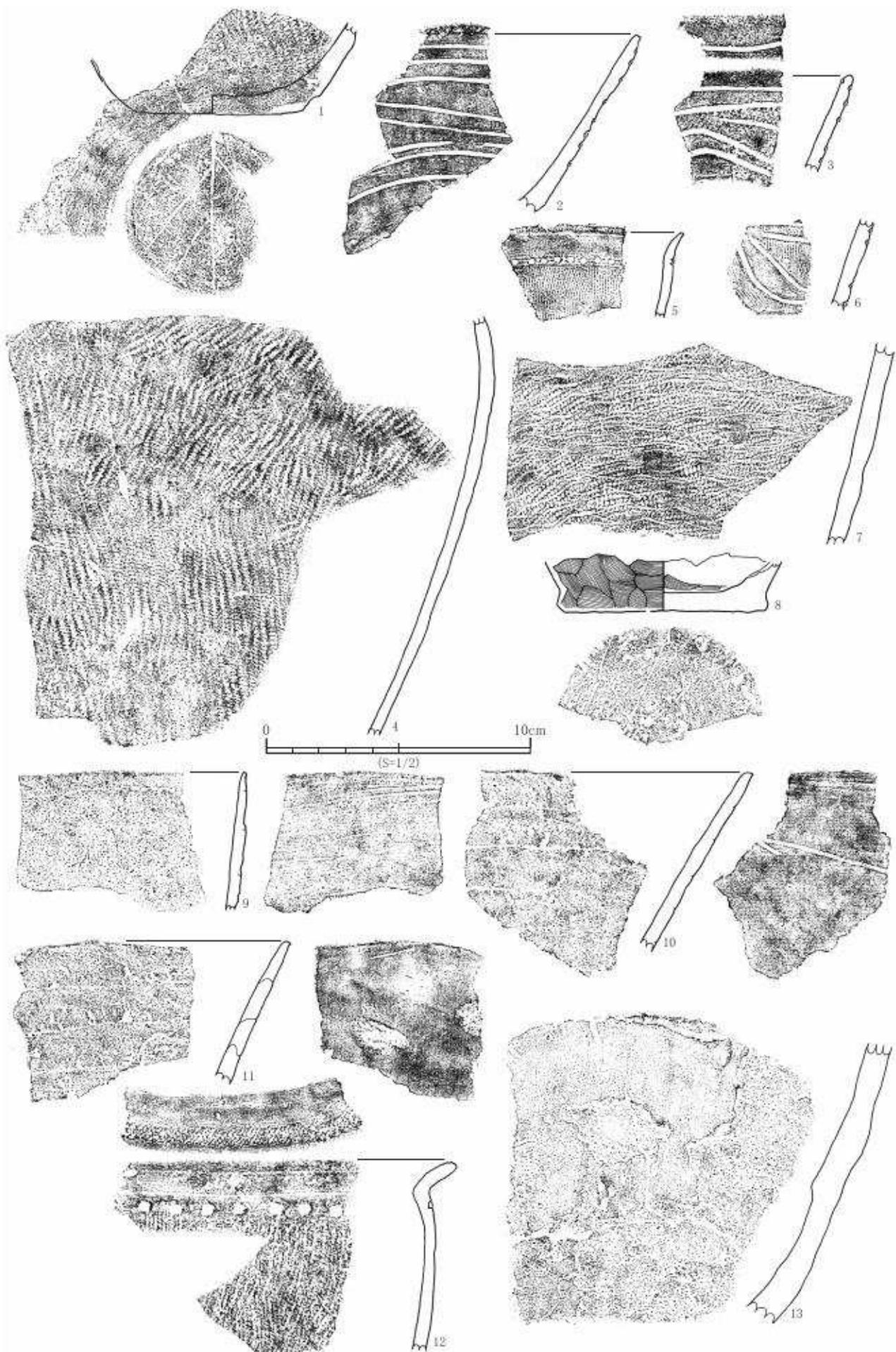
## (6) 出土遺物 (第4～10図、写真図版4、5、6)

### i) 土器 (第9表)

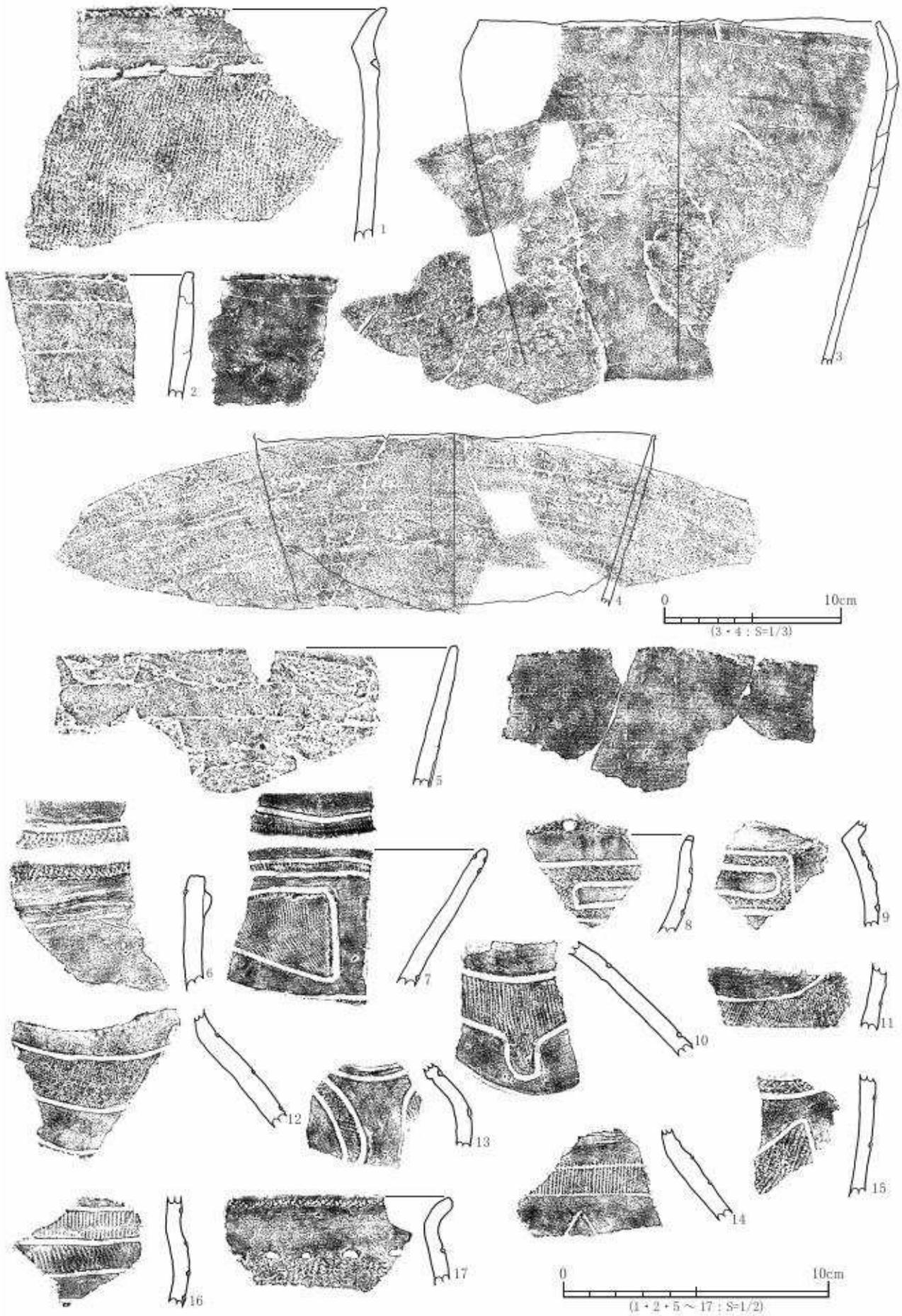
今回の調査では、縄文時代晩期～平安時代の土器計1,296点が出土し、このうち縄文土器3点、弥生土器56点、製塩土器25点、土師器・須恵器6点の計90点を図示した。出土総数の約55%が弥生土器、約35%が製塩土器であり、両者で全体の90%以上を占める。弥生土器は型式学的特徴から弥生時代中期に属するもので、器種は甕、鉢、高坏、壺、蓋が出土している。甕は体部との境に列点文を持つもので、列点文の表現方法は円形竹管状の工具で器面に対して垂直に刺突するもの(4図5)や斜位に刺突するもの(4図12)、短沈線状のもの(3図17、5図1など)などがある。鉢や高坏は磨消縄文技法による楕円文などの区画文を配置するもの(3図1、8図2など)がある。壺は口縁部と体部を平行沈線で区画するもの(3図12・13)や口縁部に隆帯を持つもの(5図6、8図7)がある。地文は単節縄文に加えて、植物茎回転文(3図1・3、4図5・6など)、合燃(3図17)、直前段多条(4



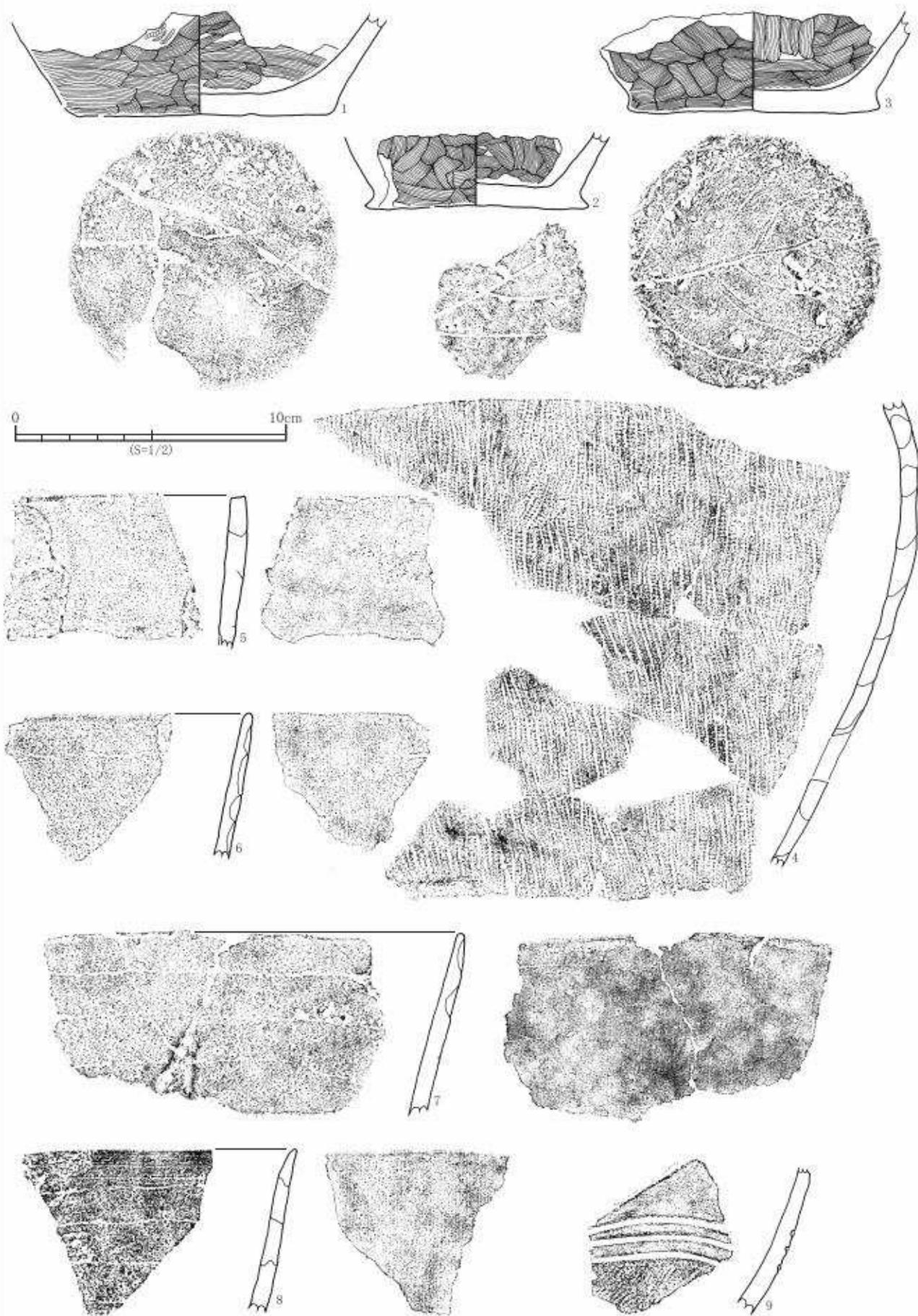
第3図 石組織遺構出土土器・サブトレンチ1出土土器 (1)



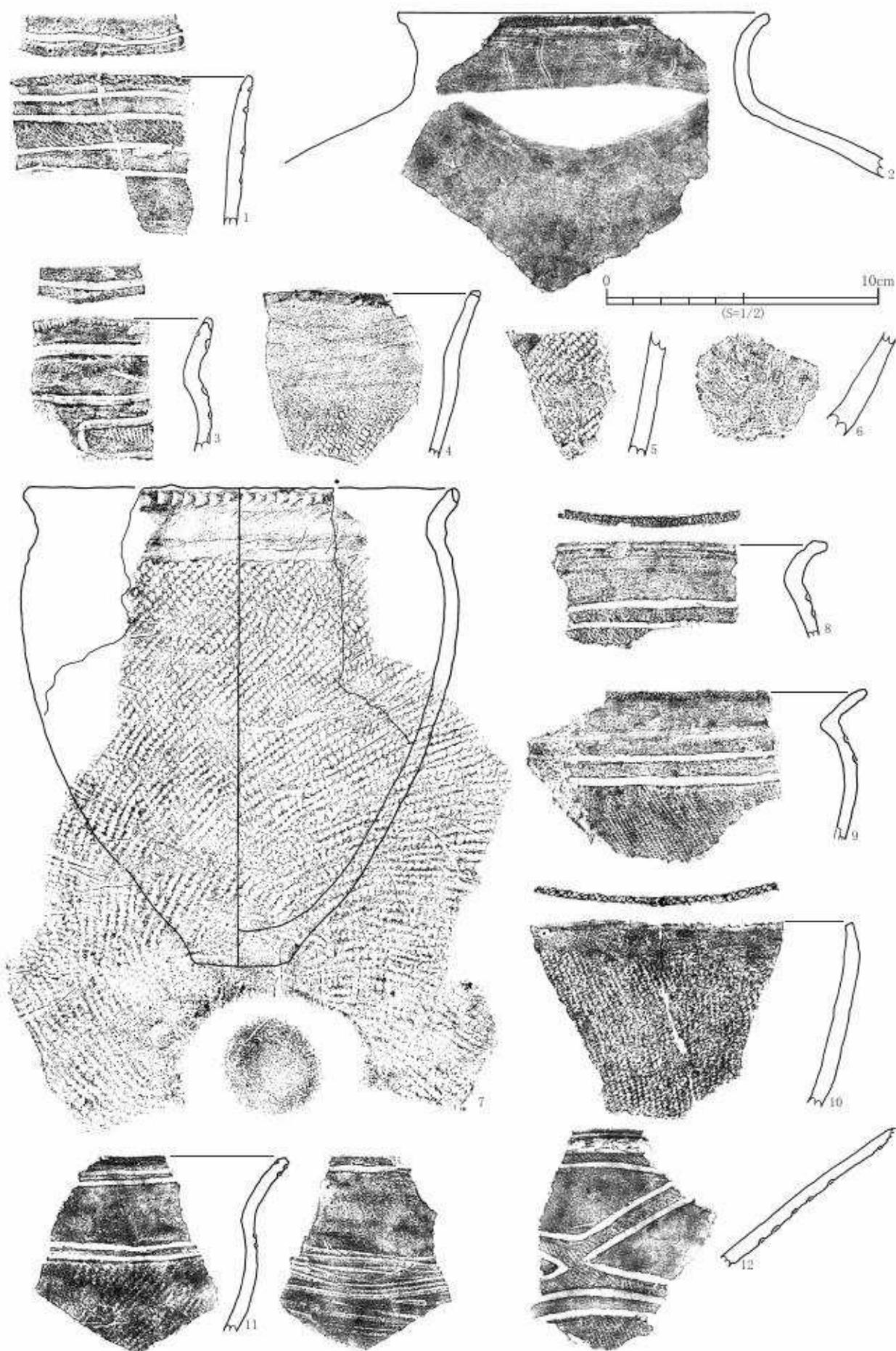
第4図 サブトレンチ1出土土器 (2)



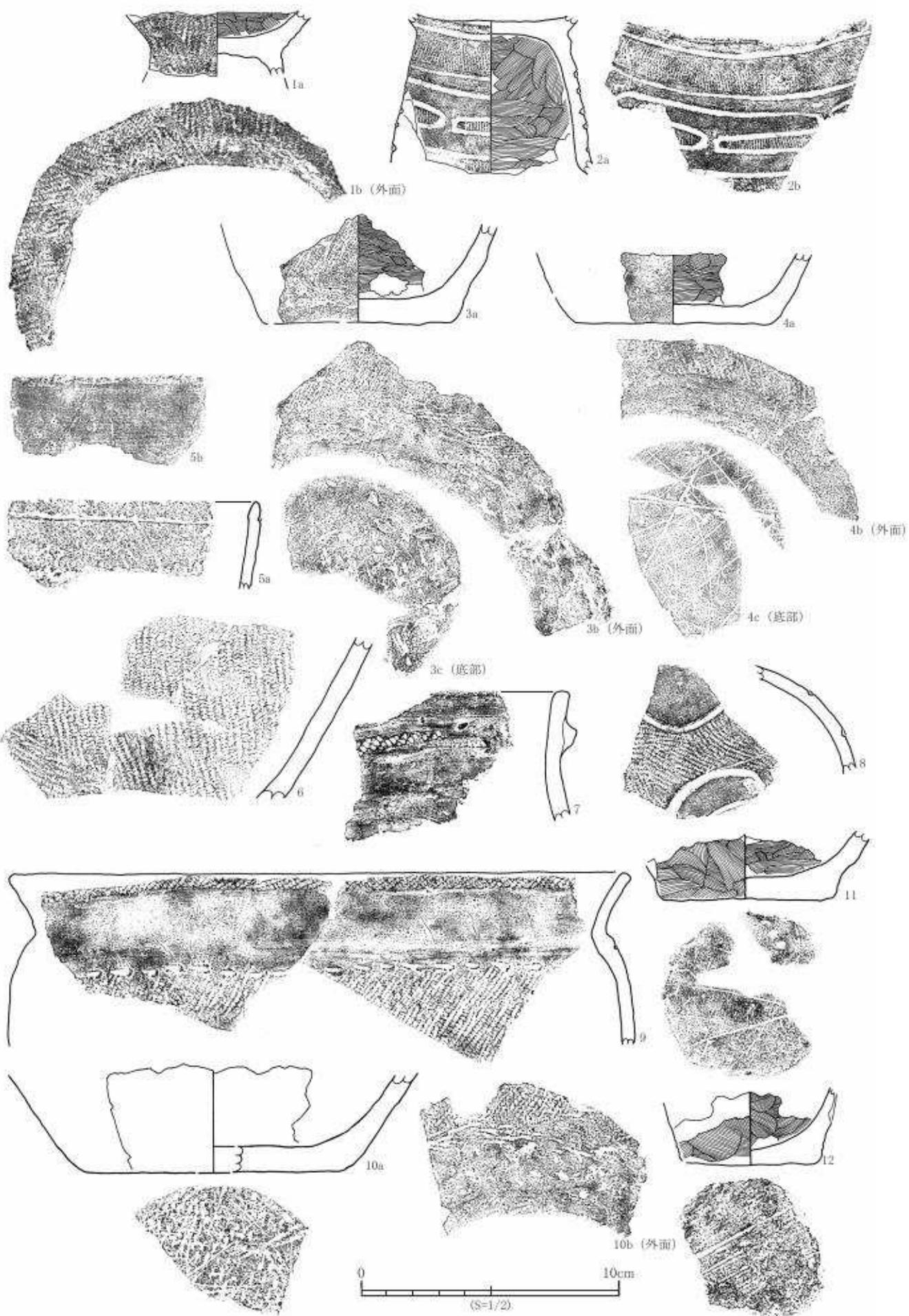
第5図 サブトレンチ1出土土器 (3) ・遺構外出土土器 (1)



第6図 サブトレンチ2出土土器・遺構外出土土器 (2)



第7図 サブトレンチ2・3出土土器・遺構外出土土器 (3)



第8図 遺構外出土土器 (4)